

龍口了信

予備門の頃

予備門の頃
(抄)

私は明治十七年の九月に、芳賀矢一君や中村是公君、夏目金之助君（当時は塩原金之助といった）等と一緒に一つ橋の大学予備門に入学を許された。予備門に入る前は、神田中猿樂町の明治英学校へ、やはり芳賀君や中村君、夏目君と一緒に通っていたのであるが、私は英語を始めるのがおそく、他の者は一級まで進んでいるのに、二級までしか進んでいなかったから、試験を受けてはみたものの、はいれる自信はなかった。（一級、二級というのは、半年ずつで下からだんだん上に進むようになって

ていたのである。) それで成績の発表も見に行かなかつたが、発表を見て帰って来た中村君や夏目君が、「龍さん龍さん、おまえもはいつているぞ」といったので、非常に嬉しかった。その頃は私は「龍さん」と呼ばれ、中村君は名をそのままに「ぜこう」、夏目君は「金ちゃん」、芳賀君は「矢一さん」と呼ばれていたのである。芳賀君は当時、明治英学校から半町も離れていない同じ中猿楽町の伯父し斯波ぼ有造さん（貞吉君のお父さん）の家に、貞吉君や和達わだち陽太郎君と共にいた。そこは今の三崎町の電車停留場の近くで、神保町の停留場の方から向って左側

に当り、跡見女学校の南隣であつた。女学校とは板塀一枚で隔てられているだけであるので、芳賀君の所に遊びに行く者がよく板塀の節穴から女学校の中をのぞく。女学校の方ではとうとう小さな板を打ちつけて穴をふさいでしまった。私は明治英学校に通っていた時分は、九段坂上の富士見町に中村是公君等と一緒に下宿していた。中村君と私とは、村はちがうが共に広島県の宮島の対岸に生れ、小学校は同じ小学校に通つたのだから、子供の時から友達である。二人で広島から山陽道、東海道を歩いて上京したこともあり、仲よしであつた。夏目君も

同じ町内に下宿していて、よく三人が一緒になった。當時は靖国神社の前面には競馬場があつて、その南側に我々は下宿していたのである。

予備門に通うようになってからは、斯波さんの家は中猿楽町から牛込の若宮町に移り、芳賀君と貞吉君とは、その家の門を入った右手にある長屋造の離れに起居していた。和達君も初めはそこにいたが、これは半年ばかりで他に移ってしまった。牛込の斯波さんの家は、もと片桐何とかの守かみという幕府の御茶坊主の頭の家で、家じゅうが茶室のようになっていて、茶を焙ほうじる妙な家なども

あり、二千五、六白坪という広い邸には茶畑が到る所に
あつた。北隣は川田甕江おうこうさんの家で、西側にはさいかち
坂という坂があつた。芳賀君等のいた離れは八畳と六畳、
それに玄関と台所がつき、また納屋のようなものがあつ
た。部屋は茶畑に面していて、小さな机が隅の方に並べ
て置いてあり、こわれ椅子や粗末なテーブルもあつて、
それらが乱暴に散らかっていた。私などが遊びに行くと、
縁側に腰かけたり、寝ころんだりして話す。時には蕎麦
を食ったり、焼芋を食ったりもする。〔中略〕

芳賀君は特に勉強家というほどでもなかつたが、その

頃から頭はよかった。お父さんが国学者で湊川や塩竈の宮司を勤めた人であるから、その感化を受けて、和歌には特に趣味をもっていた。百人一首もことごと悉く暗記していた、カルタ取には勇者であつた。人のことを悪くいうのでも、歌でやるという流儀で、常に歌を口ずさんでいたものである。しかし当時は芳賀君が将来国文学の大家になろうとは思わなかつた。夏目君にしても、あれほどの有名な小説家になろうとは怪我にも思わなかつた。ただ夏目君は大学へ入る頃には、朝日に載っていた半井桃水の小説を始終読んでいて、「こいつはよく書いてある」

などといっていた。後では桃水の所にたずねて行ったこともあったようである。「中略」

その頃は、勿論今のようなスポーツはやらなかったが、それでも予備門の運動場には機械体操の鉄棒があり。ボール投げもやっていた。それからボートがあった。私は予備門へ入ってからは、富士見町から猿楽町の末富屋という下宿に移り、中村是公君、菊池謙二郎君、とくのうぶん得能文君（得能君は遂に予備門には入らなかつた）等と一緒にいたが、ボートは柳橋の下につないであるので、神田から歩いてく歩いて柳橋まで行って、ボートに乗った。そし

て和服に袴をはいたまま隅田川を漕ぎまわるのである。大学に入ってからにはボートの倶楽部も出来て、中村君や白石元治郎君は法科の名高いクルーであった。これに対して夏目君や私どもは文科でも倶楽部をつくったが、物にならなかつた。芳賀君も下手な姿勢でボートを漕いだことを今に記憶している。

書生時代の一番の娯楽は寄席に行くことであつた。講談と落語との寄席は分れていて、私ども硬派の者は講談の方の寄席に行き、落語の寄席には滅多に行かなかつた。小川町に小川亭という講談専門の寄席があり、ここには、

明治英学校に通っていた頃から、よく中村君や夏目君を誘って出かけた。芳賀君と一緒に行ったことも度々あったと思う。当時小川亭の木戸銭は二銭五厘か二銭。それで嚴冬でも座蒲団も火鉢も取らず講談趣味で頑張っていたのである。芝居は高くてもとも行かれなかったが、新しん富座とみざの始めて開けたことを記憶している。牛肉店は、予備門から二町ばかりの所に松本という店が出来た。これが牛肉店の初めである。珍しいから、時には行ったが、高いのでそう度々は行くことは出来ない。鳥屋はシャモ屋といって、牛肉店が出来ない前からあったが、これも

高いから書生はあまり行かなかつた。蕎麦、うどん、焼芋、炒豆いりまめなどが、まず書生の食うものであつた。蕎麦はもり、かけ各八厘、当時は天保銭てんぽうせんが八厘に通用していたから、天保銭一枚で蕎麦のもりを食うことが出来たのである。寿司などは高級のもので、書生は口にしなかつた。何しろ下宿料が一月三円から三円五十銭、上等で四円という時代である。当時酒は日本酒が一合二銭か三銭であり、ビールは一瓶二十五銭か三十銭で、日本酒はどこにでもあるが、ビールは滅多になく、珍らしかつた。こんなわけで書生は飲むならみな日本酒を飲んだ。芳賀君

は後に非常な酒豪になったが、書生時代には酒豪というほどではなかった。書生時代からよく飲んだのは、後に支那公使になった山座やまざ円次郎君で、下宿屋の机のそばには、いつでも一升徳利が置いてあった。山座君と芳賀君とは仲よしで、よく一緒に酒を飲みに行っていた。当時は予備門全体でも人数が少い時代であるから、今頃とちがって、全部がすぐに親しくなる。学友の心性も互によくわかっていて、意気相投合していた。そして天下をとることばかり夢みている連中だから、朗かなものであった。

当時も神保町の辺は街になっていたが、猿楽町の辺は

邸ばかりで、町屋はなかった。一つ橋の予備門は東京大
学法理文三学部と同じ構内にあり、その北に接して、斯
波さんの持地があった。そこが後には校有となって、高
い高いブランコが作られ、夏目君がそれに乗るのが一番
上手であった。小川町の方は町屋が続いていて、街が曲
がるちよつと手前に有名な書物屋があった。西洋造のよ
うな土蔵造の店で、ここには西洋の新しい書物が沢山な
らべてあったので、我々は度々その店へ本を見に行つた。
これが小野梓さんの東洋館である。小野さんの姿もその
店でよく見かけた。

私は病気のために学校を休んだので、明治十七年、一緒に予備門に入学した芳賀君や水野、福原、正木、山座、白石の諸君、その他立花銑三郎君、しゅうえ菌田宗恵君、中川小十郎君等より一年おくれて明治二十三年に第一高等中学校（我々の在学中、明治十九年に予備門が本郷に移り、第一高等中学校となった）を卒業した。第一高等学校の同窓会名簿を見ると、中村、夏目、正岡（子規）君等は私と同じく二十三年の卒業になっているから、これらの人々も何等かの理由で一年おくれたのであろう。

（『国漢』（芳賀博士記念号）昭和十一年十二月）

日本文学電子図書館

予備門の頃(抄)

著 者：龍口了信

制作者：宮澤一郎

底 本：「漱石追想」

岩波文庫、岩波書店

2016年3月25日 第1刷発行

日本文学電子図書館